

[試験紹介]

水稻の出穂期の予測精度向上

近年の気候変動の影響により、水稻の生育が大幅に早まり、病虫害防除の作業スケジュールが立てにくくなっています。また、令和6年は県南地域中心にイネカメムシを原因とした不稔による収量低下や吸汁による品質低下が問題となりました。イネカメムシの適期防除を計画的に行うために、出穂期の早期予測が求められています。

そこで、定植時期を変える作期移動試験を行うことで、様々な温度環境での生育データを蓄積し、出穂期の予測精度向上を図ります。コシヒカリは既に精度が高く、出穂期が予測できる技術が確立されているため、今年度の試験では、新たに主食用米の「とちぎの星」と飼料用米の「夢あおば」、「月の光」の出穂予測法の確立を目指します。

試験では、5月上旬から7～10日おきに苗の移植を行い、移植時期ごとの出穂期を観察します。稲の生育段階を数値化するためのデータを収集し、出穂期の予測を可能にします。

(水稻研究室)

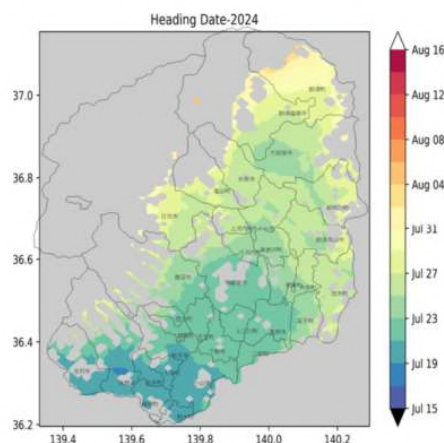


写真 1 農業気象メッシュで算出した
県内出穂期分布(コシヒカリ)

[試験紹介]

農業分野でのカーボンニュートラル実現を目指して

当センターでは、農業分野におけるカーボンニュートラルの実現を目指し、取組を進めています。今作のビール用二条大麦では、バイオ炭（もみ殻くん炭）の施用による土壌への炭素貯留効果と生育改善効果を解明するため、キリンホールディングス株式会社及び早稲田大学との共同研究を開始しました。

土壌環境研究室と麦類研究室が連携し、ビール用二条大麦試験圃場において、水稻のもみ殻を炭化させたバイオ炭（もみ殻くん炭）を土壌に混和し、播種を行いました(写真1)。

今後は、当センターで土壌の物理的・化学的性質の改善効果と生育・収量への影響を調査し、早稲田大学において土壌の微生物への影響を解析します(写真2)。共同研究により、その効果とメカニズムを解明することで、環境に配慮した安定的な作物栽培技術を確立し、現地への普及に貢献することを目指します。



写真 1 もみ殻くん炭施用後の様子



写真 2 茎立期における生育調査の様子